日本書紀

十五
十六

太政官文庫
和書門
類 八四九八 號
九二 函
一〇 架
二〇 冊

内閣文庫
和書 類
八四九八 號
二〇 冊
一三函 五架

内閣文庫
番號 和 8498
冊數 20（10）
函號 137 46

国立公文書館
National Archives of Japan

廣辻氏
藏書記

日本政府圖書

# 日本書紀巻第十五

白髪武廣國押稚日本根子天皇　清寧天皇

弘計天皇　顯宗天皇

億計天皇　仁賢天皇

白髪武廣国押稚日本根子天皇
しらかのたけひろ国おしわかやまとね
この天皇を大はつせわかたけの天皇の三
はしらにあたり給ふみこなり母をば
かつらきのから媛といふ天皇生まし
ながらにしろかしひとしかなりておほ
人たからをめくみ給ふ大はつせの天皇
みこたちの中にくしひなるあやし
み給ふ所なり二十二年立て皇太子となる

太政官文庫
日本政府図書

給ふ二十三年八月大はつせの天皇ほうじ(崩)給ふ
さかりに吉備(きび)のわかひめひそかに幼子(わかご)星川(ほしかは)
のみこにかたりてのたまはく天のみくらゐに
のぼらん(欲登天下之位)とならば先大くらのはつさ(官)をとれ
長子いはきのみこ母(をや)夫人のその幼子(わかご)をを是我
しゆることをきゝて磐城(いはき)皇子のみこいはく
おやなりといへどもいはくぞあさむくべき
やまことをよのつし星川のみこゆるされ
まれちゝ母の夫人(おとし)のことばのまゝ

はひよ大くらのはつさをとつて外門(ほかのかど)を
さしかためてほしいまゝにそなふ
いきほひ(権勢)ほしいまゝ(自由)にはかりことをなし
おやをころし大伴の室屋(むろや)の大むらじ東漢(やまと)
とあやのはたのあたひ(直)におほせて云大はつ
せの天皇の遺詔(のちのみことのり)の今まさにいた
らんとすそむべのちのみことのりにしたがひ
のりて皇太子小はつのみこにつかへまつれ
ちちいくさをおこして大蔵(おほくら)をかこみ

外よりふせきつゝみて火をはなちてや
きころそこの時に吉備の上つ媛いちきのこ
この異父(しそ)の兄君(いろね)城丘(きのをか)の前来目(さきのくめ)(名をもらせり)はほ
し川のみこのまゝにやすろされ
ぬらくにかうちの三野のあかたぬし
小根(をね)おちおのゝきて火をさりてのかれ
出草香(くさか)部の吉士(きし)あやひこ(漢彦)のあしを
いだき(抱)てよりて大伴の室屋(むろや)の大むら
しに祈まうさしめて云奴あかたぬし(縣主)

小根かほし川のみこにはかりまつりしことは
まことなりしかれど皇太子にそむきまつりて
まつりしゆるさるゝことあることかなし。ふ おほん(洪)
なるめくみ(恩)をくたしひと(他)のいのちをまて
くひぬまん漢彦(はやひこ)これちちはふさおこゝ
に大伴の大連にまうしてころそはゝに小(をと)(刑類)
根を入しとよりて漢彦をもして大むらし
にまうさしめて云大伴の大むらしあ
君おほひなるめくみをくるし て せされ

る令をてはつのをしもちて日の色み(ひろ)る
ことをえらずあまれちら難波の来目のむら
大井戸田(おほゐとのた)十町をとりて大むらしにをく
るまつ田地(ところ)をとりてあやひこにあたへてる
てその恩(めぐみ)をむくゆこの月吉備(きび)の上道(うつつみち)の臣(え)
ホ朝(みかど)にうらんおうらとすてのちらに生(あれ)ア
せる星川のみこをたすけんと思ふてふ
ないくさ四十艘(ふね)をひきゐて海にきるわ
うつふをてきしてやきころされのを多

て海によりうつり天皇をしろしめちはるひ
とをきゝして上道(うつつみち)の臣ホをせめて其(おさ)
むりかの山部(やまのへ)をとられをりく冬十月はちのよ
この朔ことのえさちの日大伴の室屋大連
臣連(おみむらじ)ホをひきゐて璽(みしる)をひつぎのみこに
ささてまつる
元年春正月はちのくいぬの朔みかののつよ
の日有司(つかさ)にみことおほせて壇場(たかみくら)を磐余(いはれ)の
甕栗(みかくり)に陵ちきてあまつ日つぎしろし

めそはみかよ宮をさだめ給ふかつらきの
韓媛をたふとひて皇太夫人とし大
伴の室屋の大むらじをもとの大連と
し平群の真鳥の大臣をとりておほひ
まちきみとしたまひ故のごとく臣連
伴造等おのおのつかさくらゐのまゝに
はべらしむ冬十月みつのとのみの朔か
のとのうしの日大はつせの天皇をたぢ
ひのたかはしのはらの陵におさめまつる

時に隼人ひるよるみさゝぎのほとりによ
ばひなきさけぶ食をあたふれどもくらは
ざりしと七日ありて死ぬ有司墓を
みさゝぎの北につくりて禮をもちて
これをはうぶる一とし大とし かのえ
さる
二年春二月天皇みこなきことをうらみ
給てそれより大伴の室屋の大むらじを
くにくにゝつかはして白髪部の舎人をつ

部のうしちてあるかへのゆきへちとおきて（膳夫）（靫負）
ねうちくはのこれのあたをうしてのち
のよよみせしめんとのたまふ冬十一月
よをれゐのさてまりをすのおほせよよ
てちうまの国のみこともち山部のむらし（天掌）（供奉）
のとをつおやいよの来目部の小楯をあ（司）
りしのこほりよまかせてちゝみのみや（縮見屯倉）
けのおふとをしうみ部のみやつこ（首）（忍海部造）
細目かよひもろよいちのへをしは（市辺押磐）
のみこの子億計弘計のみこたちをみつ
けたてまつりてうやまひあかめたてま（畏敬兼抱）
つりて養したてまつりをのれちから
しんてみやつくしのたてまつりをりの（供給）
をもてたてまつりをのれちから宮のみや
をたてゝかりにましまさせたてまつる（安置）
をいまよのかたちせてみことは使をそ
天皇おとろきなけきたふとやゝ久し
くいふことおほしてのたまはくよひれ（愴懐）

よろこはしきみかと天おほひなるめぐ
みをうれしくおもひのよふたりの児を
りてせちこの月小楯をして志るし
をかうしめ左右のとのゐをあつてあ
つしはいふりてもいくさてまいる語い
弘計天皇の紀にあり
三年春正月ひのくるいの朔日小楯に億
計弘計のみこをふてまつりて江の
国はつかさ臣連をもして志るしとも

さしめ王こくうまきをもて家中り
むかへ入まつる
夏四月きのとうの朔のとの日億
計王をもてひ流きのみこをし弘計
のみこをもて皇子とし秋七月飯豊の
ひめみこ角刺の宮にてぬくとしさ
まふ人はのりてのさきひとり
女の道をしりぬまさいはくんそことれ
ふつきはみなてくきひを知るもしと

与夫 初交

交給男

のたまふ。此丈あそこにいふといまさ　はやひとつあまれ
九月には朔日のとのうし
の日にあたりしをまうして風俗（くにぶり）とゐ
くつはせしむ冬十月にはのえむまの
朔きのとのうの日みことのりしたまひて
犬馬（いぬ）もてあそひものなとてまつりをとゝ
十一月かのとのゐの朔はちのくさつの日にあた
運は大極（基）よこよのあまねしからさきぬ
をとしすちるはれそこにはゆふせてはりつ　其

らちのかきうつりて海いは
この月にはこのほのくにかよらむひ
に使をまうしてはれきさてまつる　海表諸蕃
四年春正月かのへいぬの朔ひのへさはの
日にあさのほのゝくにしのはらひに朝堂（みかど）
にてよのあまねし物（のちの）をさまふことお
のくしれあり。亥閏五月おほきにさ
けのみそうくと五日秋八月ひのとのひ
はしの朔はのとのうしの日天皇

みつからとらへひとをとひきゝたまふこの日
蝦夷はやひとならひによりまうしたかふ九
月ひのえねの朔日天皇射殿にいてまし
てもゝのつかさおよひわたのほかのつかひ
にみことのりしてゆみいさせ物をさ
まふことおの〳〵しなあり
五年春正月きのえいぬの朔つちのとのう
しの日天皇宮にかんさりましぬ時に
みとしそこはく冬十一月つちのへむまの

朔ついたちの日かたをかの坂門原のみ
さゝきに葬まつる
弘計天皇　顕宗天皇
弘計天皇またの名は久目稚子大兄いさほわけの天皇
の孫市辺押磐のみこの子なり母を
荑媛とまうして
譜第に云いちのへおしはのみこ
蟻臣かむすめ荑媛をとてはらむ
に三たりの男ふたりのひめみこを

生ませりその一を居夏姫(いらつひめ)とまうす
その二を億計王(をけのみこと)またの名ハ嶋稚子(しまのわくこ)
またの名ハ大石尊(おほいしのみこと)その三を弘計王(をけのみこと)
またの名ハ来目稚子(くめのわくこ)とまうすその
四を飯豊女王(いひとよひめのみこ)またの名ハ忍海部女(をしうみへのひめ)
王(みこ)とまうすその五を橘王(さちはなのみこ)とまうす
一本に飯豊女王をもて億計王の上
にいれてあり蟻臣(ありのおみ)ハ[illegible]
孫の子なり

天皇ひさしくほとりにおちましまして
こと〳〵におほんさかのうれへさ
しるおほむ、あとをあらしめ給ふに
よまけくしかれけるをみそなはし
て四科(ころ)をみそなはげさ為ことゝくにお
ほそうたくしらをあさめぐみを
ほどこして法をことしきおこなひ
(流)(行)
(貧)まましきをめぐみやもめをひさ(郵)
しく天下もつひ法を兌穂天皇三

年十月天皇の父のみこと市辺(いちのへ)押磐(おしいは)
のみこをよしとのり佐伯部の仲子(なかつこ)蚊
屋野(やの)におひて大はつせの天皇のために
ころされ給ひぬよりて同穴(ひとつあな)にうつみ
ぬこゝに天皇と億計王と父(かぞ)のみこのころ
され給ふことをきこしめしておそれ
おちてにげうせて丹波のくに
きまへとねり日下部のむらし伏主（伏主 八日）
（下部むらしの名也）とその子吾田彦(あたひこ)（伏主の子也）とひそう
天皇と億計王とつきそひてたんばの国
余社(よさ)のこほりにさけれき使主はひは名字(な)
をあらためて田疾来(たとく)といふなをころ
されんことをおそれてこれよりはりま
の国縮見(しじみ)山のいはやにのがれ入てみ
づからわなき死そ天皇なほ使主のゆ
くゑをしろしめさん兄(いろね)億計王とそ
すゝめてはりまの国あかしのこほりによ
いてましてともに字をあらためて丹

陂のいるとまうりて志くみのみやけの首
よ佐久治ふ、（志くみのみやけの首いそ うし部の造けそぬるら）吉田彦（あをひこ）
らしよいさりまてもりもまうらそまる
くしきのひ佐のまつる白髪天皇二年（臣 礼）
冬十一月ちわまの国のみことゝもち山部
のむらしのとを川おやい与の来目部（くめべ）
の小楯（をたて）ありしの二ほのまおおて三川のう
小ちなのゝのさてまつりのそなふ（一云 郡）
縣よめくりあり さけくちてみのみやけの
田大りるをさきん

おうとよあひぬ新室（にひむろ）におひしりて夜
をもてひろは佐久りそれちら天皇兄（弟）
億計王よのうりてのさまそくまささも（乱）
ひをさうりてこのとしよあまさのら（記）
とかさぬぬ名をあつりしさつときさこ
こちをあうそさ人ゝとこよひよあうまあ
とのこまふ億計王いさみるけひてのう
まはく其三川のうらひあけてころさ
きんと身をゆるさふりてさしおみを（厄）

まぬかれんとはかれるとのたまふ天
皇のたまはく昔は是れ去来穂別(いさほわけ)天
皇の孫(みまご)なりしかども困しみ人につかへ
てうし馬をかふあに名をあらはして
ころされんよりしのんやはひに億計王と
ふかくさへてなくえ(涕泣)おさへかたし(自禁)億計王
のたまはくしかれはそれかし弟(おと)にあら
ずしては誰のよくこゝろ(大節)をあはきて(激揚)
めてあらはさんつき天皇いなひてのたま

まはく僕(やつこ)の才となしあまはかつていきは
ひとのくあらんや億計王のたまはく
弟(いろと)はのしらく(英才)さかしく(賢佗)ましましこゝに
すてそくろひとなしのくあひゆつる
ゆつることふたゝひ三たひよしても
たしして天皇はたゝのへあきんとの
たまひてともに室(むろ)の外(と)にはなて下風
にましせうやけのおうとおはせてか
ましきのこれくのれくによそへてひと

ともさしむ夜ふけ酒さけるそをし
てはあてくまひおもりてうやその
首小楯(次才)によりて云僕(やつこ)このひともせるの
をみなは人をえりとらてたのみをとい
つしうし人をさきんしておのれ
をのちはせりはしこいやまひて節(こと)は
おもむくありそきゆるさでまで禮(ゐや)を
あきらのふそ君(むきひとのこ)なりといひはべしこそ
小楯ことしきてひとともせる者はことおはせ

てうつて庭へとびふこなる兄弟あひゆ
川をさすぬと久しうありてしるあらはい
そ小楯(をたて)せめて云なんあれぞあれあるとお
そ武をみやまさ川て庭へとまうれ
億計王(をけのみこ)まつてまひさまふことそでてよ
おもんぬ天皇はきよまつてうはの
衣帯(えうおび)をひきはくろひて室寿(むろほき)して
のるまちくはいさはるえのもんの哉
旅はいまつるはしらは此家長(きみ)の御心

のしつまりなりとりあくるむねうつはりは、
此家長の御心のはやしなりとりおける
椽橑は此家長の御心のとゝのほりなりと
りおける蘆萑は此家長の御心のたひ
らかなるなりとりむすへるつなかつらは
此家長の御いのちのかたきなりとり
ふく草葉は此家長の御富のあまり
なりいつも雲はにひはりにひはりの
の十つかのいねのほ浅甕にかめるおほ

みきとうまらにをやらふるかね吾ひこ
ひとうちふれあしひきのこの傍
山さをしかのつのさゝけて吾まひすれは旨
酒餌香の市にあさひもてうちぬ手掌
川こめやうしようち上たまへ吾と
こよたちと寿おはりてそれちらるつ
てこよの稲にあはせて云
いなむしろかはそひ柳みつゆけは
なひきおきたちそのねはうせす

小楯かしこまりて云おりうし祢がはくいは
さきの人天皇はおほよし川こまひをし給
ふ さはくもいふへ立おもひ さうをいつかはさかはらみるはそうふ みけひて
のかまちくやまとはそくのちゝちあさぢ
そうおとひやかはこう是なかり小楯これは
よつてぬかくあやしうて佳くこれと
いはしむ天皇きゝたひてのちまちくいそ
のかみぬかりの神楫もときりまくもしけり
ひ市辺の宮に天下しろしめして天より

川国より川押磐のみこの御裔やからなり
これなり小楯おほきによおどろきてあき
ぬるをもちかれていゐ人てたのみまゐりは
はのまつりをおさめさてまつりてやゝ
らをひきおてはうしみはのまつる
こゝよことくくる郡のおほんたちをお
うして宮をはくかに日をつもして
かりはたてまさせさてまつりをわれ
もろゝやこゝよまつてびゝふくかの王をも

うへんにまちをもよし白髪天皇きこしめ
まろにひなけひてのちまちく朕子なし
すて嗣とせんとのたまひて大臣大連と
そのわゝもとをえやのうちよさらめ給ふ
よつてはりまの国のみことものち来目部
の小楯をして節をもたしめ左右の舎
人をめしてあそびにいつてむかへて
まつる白髪天皇三年春正月天皇億計
王をむかへて津の国にいたりまし臣

連をして節をもたしめ王の青蓋車
をもて宮の中にむかへ入る夏四月億計王
をもて皇太子とし天皇をたすけて皇
子とし給ふ五年春正月白髪天皇の人
さり給ふこの月皇太子億計王と天皇と
くらゐをゆづりあふこと久しくしてね
にまはてこれによりて天皇の姉飯豊青
皇女をしてたかのうちやにてみかど
まつりごとし給ふみかのうちしうみ

のいひとよあをのみこと、ことのをはるときよ 當世
うち川なる人うちよみて云
やまとへよみかけしのえをしのこの 海
このなかなるはめさしのうや
冬十一月飯豊青尊の人さかりまれかう
きの垣日のとうのみさゝきよおさめア
川十二月百官おほきよ川ちへまて皇
太子億計天皇のしるしをとりて 璽
天皇のみまへにちかきておこむてまう 再拝諸臣

きみよちのくらゐにはきはてのりたまふ
くらゐ天皇のくらゐおふいさほしまし
ゆゑひとをてをうくしゆつときこと
をあらそひてむくられはへしよそれ
ゆのちのかことなりとのりたまひて天下
をて天皇のゆへつかさまつる天皇のくらゐに
ゆつりてゆをもて元位はきくましとの
たまふ又白髪天皇まつ兄をもまてんと
おほしてひはまつのみことよさりてまつり

已往前後(さきのち)つらくいふひてのこしまけく日月
出とるとまもしひやましその光よきりハ
そうし時雨ぬれとかはそくまき
いろもきハよつござ所人のためにして、
兄よ位かまりまてまさをひとのかれん
ことをもちゐる德(いさほひ)とてうしられをとき
て処ことかきかなのそれもちゐることゆる
ハ弟いやまふのこといりよあらし弘計(をけ)を
処ことをしのひそ兄う位くしみやや

宿ふいはよの神おとふかききおきされしよ
きらのいはらんそこはつゝひとを皇太
子とつろんしたてまつらん億計のこ
このきはちく白髪天皇ハ吾兄のゆへ
をもて天下の事をあけて先承よ
さはけ位つを我それつきなし
おりんみらよ大王(きみ)は道よちる利のつう
るられをときくのかけく帝孫(きみのこいる)あら
これあかもちとききいこれをみかりのれ

しぬるもへしして播神(うまひとき)よろこひ天
そいろくのよろこひをうけふあちれ
みしておほんよろこふ地とゐむ
めくみにあふことこゝをめりてよく四に
維(是)をのるりてなかく(永)(ひさふる)よろ川のことをさゝ(業)
あ絡いさをしあのはまかなりよちのよし
てきよれうち世まてわりおほひなるう(造)(物)(降)
なうもくなうつれこゝよえてなつくるゝと(映)(起)
なましこの日見(ぞ)といふとああよ先をらん(処)

いさをしあるをしてようとさいこうく(拠)(咎)(悔)
いつるいかるなん吾きくる天皇も
てひさしくむなしからへつつは天命(あまのみことのり)
いりてさうふせくへつつは大王ハ社稷(くに)を
わてもうひとしおほんさうをめて
心をしきまへつことゝをちらしてさけ
むてうなしぬよいるわもれ天皇こうよは
いよおろましことも心しめせと兄の
こうわよさうあしともれとれゆきして

御坐にはしませはよくそのしきをとゝ（能）
ゝまてゆつりまゐらせしかともきかんして
をうさくもへかなはれ兄才よろこひや
まゐらせすて天下いきほひおよふ（怡々）うらや
うもの川ふるときはそれそれおほん（親）
（族）さのうはくしみのこころをおこさす（民）
元年春正月はちのとみの朔大臣大
連寺まうしてまうさくひはきの
みこ億（おけ）計のみこひしりのいきほひあ

きらたかの人よりして天下をゆつりま
給ふ陛（きさ）下まさしきはいてまつり（茂）
をのさしよあまつひはきとうけてあめ（統）
のしたのあるしとして（鳴）みおやのき（緒）
ちまわかなきいきほひをうけはきたい（列）
八上ハまさに天の心にむかひ下ハおほん（當）
あまりの神そみをふさきさまつへ（厭）
しものこころをあつてあまり日はきを
さるし給ひきいはひにこのよしろ

よのとほりの国のまつりきみちとして
ことさもちつき（蕭）のそみをうし
なをしこいふとかすかしめん天命（あめのおほし）ひ
はきのみことさいきをませとをしゆ
はるはふひるしのいきはひいよく
さんよして（聖）（福）（祚）さいさいやまひ（徳）あきら
かかすいとけなくしてはつかくる
まいやまひうけくしみちるのふこと
をはとあまはもへ兄のみこのみこと

のみをうけてあまつ日はきをうけ
はきはへとせあまつはよしとのさけ
ふてきれちうまちきこうちをち
つくめして何をのやつりのえやよあ（工御百僚）
まつ日はきしろしめそめのはさき（百官）
もんつるひとえれよろこうつあ（陪従者）
式本云弘計天皇の宮二所あり一宮
そ少郊（をの）よ二の宮を池野（いけの）よ
又式本よ云甕栗（みかくり）よこやはくつは

この月皇后難波の小野王を立給ふ天
下にゆるし給ふ
たゝうちの小野王はをあさはさり
こそくみの天皇の曽孫磐城王の
むすめなり
二月つちのへいぬの朔みつのへとらの日み
ことのりしてのたまはく先王まさに
ひにあひ給てあしのにおもはさるまゝに朕
とけなきとしにありてまけてはのゝ
遇離　郊　殞命
かくれまうけてのちとゝめむくにあらて
あすかひはききてひろく御骨を
もとむれともよくしる人なしと
みことのりおもはりて皇太子億計のみこと
いさちなきいまむではなかゝへ給そ
そこの月ふすきおきれをめしはらへて
天皇は川まとなめとひ給ふひとり
のおんれちんつかてゝゝんてまうさく
置目御のちうはある処をしれをこう
外纂大業　勝　春宿　聚　虚

すてさせすてまつらんと宣へそて
置目（おいめ）て老嫗（ろうう）の名かうりあふこの國
さゝき山の君のわややまとふくろ
のむくゐめいろと名と置目とふ
こゝは天皇とひつ武のみこ億計とあふ
この国よいそまして來田の綿數屋（わたや）
の野中（のなか）をはな出てみさまふよなまし
てかんなのことめこく穴（あな）よのそんてさ
けひ給ふこそのんころよおまと宣ひ

まいまし へよりごのるゝ正のいみるみ
ありく仲子のつぶね御骨をましくよそる
ありてよく正くものなしこゝよいちさ
さのみこのあのとちんつわまうして
まうさく仲子いゝ上の歯おちよわきこ
れをめて正の川つくこゝよあのとゝ
う次よらわてみうらのはあとあひ
正す流こといそとも佐ひよむくろこつく
衍をとのちうく是まして分きと坂屋

野の中にぬかりのこさゝきをはらはせて
てあひよせて一のことく葬のよそほひ
奥ことゞめし老嫗置目にみことのりして
宮のかたはらのちかき処にはんへらせ
てあつめぐみをほどこしてとぼしき(乏少)こと
なからしむこの月みことのりしてのたまはく
ましく老嫗さすらへ(伶俜)あはれしれて(羸弱)りや
りやなかれて(行歩)あゆくにはもんちそとあり(不便)
てひきはへしてそれによりて通ひ(出)
入
まゐいはへしあとのはしに鐸をとら
け給さひなくものまゝにゆんまい入て
もしれなちこれをたのしも朕汝がいたる
をちりむこうる老嫗みことのかしこうけ
さまわって鐸をならして通ふ天
皇はるかに鐸のなるをきこしめして
哥よみてのたまはく
あさちはらをそねをすきりもゝつたふ
ぬてゆらくもよおきめくらしも

三月上巳の日後苑(みその)にいでましてめぐ
り水のとよのあかりきこしめす夏四月
ひのとのとりの朔ひのとのひつしの日
みことのりしてのたまはくおほよそ人主(みをや)
のおほんたからをすゝめたまふゆゑんはたゞ
つかさをさづくるや国のおこるゆゑんは
たゞほむるのいさをしやよのさ前の
はりまの国のみこともち来目部(くめべ)の小楯(をたて)
もとめむかへて朕をあげたり

そのいさをしおもし私のねがふ人
所いふことをはゞかることなかれ小楯うやな
いてまうさく山のつかさこそよ拝して姓(かばね)
をたまひて山部連氏(やまべのむらじ)とあらためたまふ
吉備臣(きびのおみ)をもてそへとし山守部
をもて民(たみ)とすうるはしきをほめいさ
をしをあらはしめぐみをむくひて
あつきにこたへたまふめぐみうつくしびことに
き冨(とみ)はよく儔(たぐ)ふるなし　五月さゝき山の君

からふくろのすくね事皇子(みこ)押磐(おしは)
ころしまいらせはかりてころ
さるによりのそんてのしらをとふらひて
まうそことをきものあてゝ天皇
ころし給ふよしのひをもてみさゝきの戸
よあてゝりて山をとり籍帳(へのふみ)をとりて
のせて山部のむらしよはかりまうて
は倭俤のおくりの妹置目(いろとをいめ)かいさゝをしるよ
はてそれあらはるのつる狭々城(さゝき)山の

君の氏をたまふ六月避暑殿(ひさうでん)よりて戸
してうるまひきうしめそてまちきこ
まちをはかりて酒食(おほみき)をまうてみあそ
給ふことし大とし きのとのうし
二年春三月上巳の日後苑(こその)よりてまして
めくるる水のほとりのあそひきこうしめそこ
のとき給人ころよまちきこえさち臣連国
造(みやつこ)をはかりてよのあそひもよほされまち
きみたちえきわるよろこひまうし秋八

祢 万葉

月はちのとのひつしの朔日天皇ひはきの
みこ億計よのりまてのりまはく昔父
先王はゝましましけるは大ちりせ
の天皇よころされつかみをのかよまて
今よいたりていまたえをいきとほかれ
ききふところよみてきぬはとろうき
ゆくしをしひてあるのちちをきよあ
人ことをおりふ昔き父のあるいはる
よ天をいたうて兄弟のあるい兵をそむ

けをとりつきのあるい国をおさめしう
せそうのいやしきひとの子となる父
母のあくよおさと苦よ役りてを傭ろ
よして国をとりよせん市朝よあへと
よ兵をそむけをしてそれちうさ
かふいもんや昔よりて天子とれまて
今よ二とせ役けくいのみさゝきをこ
ほちつかみをとうきてるけちつさん
今このむくひをとりてせそまうおやよ

しかるにあるさうめんや皇太子億計(おけ)
のみこなけいてえこうへ給ひけれ
ちちいさめてのたまはくよろしし 歔欷 不可
大はつせの天皇をまへつのまつりことを
さいしぬきあて天下をのぞみてし 万 機
給 正 花夷(ゑやこひる)よろこひあふきし天皇の身 読
おすら吾父(そ)の先王(みこ)ハ是天皇の子(みこ)なりと
いへともなやましきよあふて天位(たかくら)よの
ほろ給ひこれをめてこれをこれハ

さうさいやしきこれをそのりきつうるを 尊 早 別
そのんてみやこへおもとこはるいまれを
か人主(きみ)としてめて天の霊(みたま)に法つまつり
んそれこはつうさる一ちまつまさ天皇
と億計(おけ)といんさき白髪天皇よあひるて
まつるあつきう法くしみとれるあ
くるるかうふうちんバある寳位(たかくら)よのぞ 忠 羅
まんや大ちりせの天皇を白髪天皇の
父(そ)かまり億計(おけ)らしるのくゆりしひとに 老

きかりとりなくさのしひとの云こと　言
としてむくひさらはなりかけれくし（光・賢 small glosses）
こゝろしてこゝろへさるはなりしめくみあり（往 small gloss）
そこゝろへさるはひとをやむるのふかきもの
なる陛下国をしろしめしていきほひ（徳 small gloss）
まさひろく天下よきこえあまねきをみ（饗 small gloss）
さいきをこはちてのくれて花衰よきよ
せしみは億計おそらくはその国はのそ
んでゆくおはんなうちをやしなよ

つきはそのごはんへつらさる二なりか
天皇のこまはくうるはしきかとの
こまらて役をやめしめ給ふ九月置
目おほくかしこてみかなん人とまう
してまうもくいきちからおとろへてき
おほはまうはて吐られさか杖縄
うれなるえそみあつまれ松のまくいと
こ川くはかくかまゝてめてそのおも
きをおくらん天皇きこしめしいるみさ

まふて物千賤をこきまぜあまのしめされ 岐
んちをいろこかさねてあひのこきこと
をなげき孫てをれもち歌をうたひて
のこまはく
おきめのよあふみのときさめあはれうき
こやすのくれてみえんなるあらん
冬十月浅ちのくむすの朔こ月のよい
の日まうきこうちなとよのあまかし 給
ふこの時天下やまくらいらつよしておほ

んるまうさう川のきうくことわりしらし
ちうきゐよなかきひあかておほんるまう 俊
さのんなとあか稲ひとさうて銀の銭一文 比 登 捻 百姓
よのふ馬野よちひこれさ
三年春二月ひのとのみの朔日阿閑臣事
代おほんとめかをうけて任那よまう
そこるる月の神人よのりかてるかての
るまちく我みわや高皇産霊のみこと
あうすめ天地をあひいうせるいさを 祖 鎔 造

しまし酒そゝぐ民地(ところ)をとりて我月
神にたてまつれもし請(こう)まゝに我にた
てまつらハまさにさいはひよろこびあら
む事代これによりて京(みやこ)にかへりてつ
ぶさにみかどにまうし歌荒樔田(うたのあらすだ)
歌荒樔田はやましろの国かどのゝこほりにあり
をもてたてまつる壱岐
のあがたぬしのとほつおや押見宿禰を
もてまつらしむ 侍祠
三月上の巳(み)の日後苑(みその)にいでましてめぐ

水のとよのあかりきこしめす夏四月
ひのえたつの朔かのえさるの日日の神
にかゝりて阿閉臣(あへのおみ)事代(ことしろ)にかたりてのた
まはく磐余(いはれ)の田をもて我がおやた
かみむすびのみことにたてまつれ事
代これをもちて神のこしのまゝにみつ
きまゐらして田十四町をたてまつるつ
しまの下縣直(しもつあがたのあたひ)をもてまつらしむ法ち
のえたつの日福草部(さいくさべ)をおのゝかのへに法

の日天皇やはたのみやにのんさわ
こゝに紀生磐宿祢任那にあとらひ
よりて高麗にまじはりをかよはし西のか
たをかて三のからくにの王として宮
府をとゝのへおさめみづから神聖となの
る任那の左魯那奇他甲背らのはか
ことをもて百済の適莫尓解を尓林
尓林ハ高麗の地也
にころし帯山城をきづきて東
道をふせぎまもり粮をはこぶ津を
たちていくさをして飢くるしまし
む百済の王おほきにいかりて領軍古尓
解内頭莫古解らをつかはしていくさ
ひとをひきゐて帯山におもむきて
せむる生磐宿祢いくさをすゝめて
さかうちにきそいきほひまさりさかん
なりてむかふ所これやぶる一をもて百
にあてにはかにして兵つきちから
つきて事なるまじきをしりて任那

よりて是によりて百済国佐魯那奇地
甲背等三百餘人をころせり

日本書紀巻第十六
小泊瀬稚鷦鷯天皇　武烈天皇
をはつせわかさゝきの天皇ハ億計天
皇の太子なり母ハ春日の大娘皇后と
申すハ億計天皇七年に立て皇太子
となり給ふひとゝなりて法ことわりを　長　刑　理
はかりことをこのみて法令にあきらけし　分　明
日くれりてまつりことをきこしめし　晏　坐　朝
かくれたることをかならすとほし　遠

きこしめしうけたまはりことにこのみ
情(みこころ)ちとえのふ又わろくの悪をかなしみ
て一も善(よき)ことをおさめのちはおよそも
ろくの酷刑(おほきのり)をつかみそなへたまひて
ふことなし国の内のおほんなるか
ことくくみのふよひおはり十一年八月
億計天皇かくれさせたまひおほみまつりきこ
平群(へぐり)の真鳥の臣専(もはら)国のまつりごとを
ほしいままにして日本に王たらんと

おもふていつはりて太子の営(いとなみ)せんため
なりけりてそれよりまつりことのつかさとも
よふれおとかあらすとかつて臣の
韴(といふ)なりうらみ太るものくの
ひの大むらしのむすめ影媛をめさん
とおもほしてかのうちをまかし
てつきひのか宅よいてまいてあちん
とちきりしめ給ふかきひめいん
さきて真鳥の大まちきみの男鮪よお

かされぬ太子のちぎりはふかよからんこと
をおそれてかつかこと申てまうさくや
川に添かくそつはいち（海柘榴市）のちまたによ
まちまて（望）まゐらんこれよりまいて太子
ちぎをし処よいてまうんとおもは
してちかくそのまゐるを添をとし
て平群の大まうちきみの宅よいましし
めして太子のおほんとのかをのへて添（奉）
つさ馬をこひりまし大まうちきみは（宮）（呂）

うれともいりまてまつりてまう（傷）
さく添のさ馬は誰のうま（と）あかさん（飼）みと
のわのまうよこひて久しうさてま
添らは太子みこころのうちよおもは
しまのひてみおも（不喜顔）ちまいまし添は
はちうして大まうし処よいてまし
てうるかき（奇）のひと（場）（羌）なうよこしてつきこ
ひめの袖ととへてうちませわたりう
くして鮪臣（しひのをん）きうわて太子とうけ（戕）

ひめとの間をさしへたてたてまつる
是によりて太子ひけ(挑)ひめの袖(そで)をゆるし(放)
給て向前にうつりゆき立まして直(ぢき)
に鮹(たこ)に向て哥(うた)(移)よみてのたまはく
しほせのなをとうをみるにあそびくる
しひかたるてにゆくすゑてつかゆ
(一本)さほせをみるまに歌(うた)ふかし
鮹うくしうゝよみて云
をとこのみやへやのうつきゆるせとやみこ

太子哥よみてのたまはく
おほうちをされもきうちてぬるまる
そらなるしてるあるとなれおほよ
鮹又返し哥よみて云
おほきみなやへのくみうきつしめよる
なとあましらいしぬくこか哉
太子哥よみてのたまはく
おこのこのやふのしゐのきさるくとさみる
みかよとこ傍やれもしまい哉

一本やふの志戸ぅ家をもてや一つゝ
らっきにうくまゝ
太子うきとひめよ哥をおくりてのたまはく
ことうミよ我ねうしけひめさ戸るゝ
あゝほうさ戸のあさひちうさせ
鮪臣うきひめうさめよ入し哥よまて云
おほきみのミとひの志ハきもきひれ
臣もやしひともあひおもハれくよ
太子もしめてちうしめしぬ鮪い人さ

き影媛をえるかと、とくくよ父子の
いやなきうちをさとか殺ておもまて
まて此夜ともやうよ大伴金村連の宅
よいてましまて兵をつとへてはかゝ給ふ
大伴連ちあまゝのいくさを将て路よて
へて鮪臣をならら山よしろし川
う舎よやとりその一本よ鮪けひめ
夜こうりきうこの時よう影ひめころ
さらゝ処よおひ行てこのしろしおへ川る
ちみておとろきとちころまどひして

かなしびの涙めにみくかはなに哥
をつくりて云
いそのみふねをそきてこきまかり
のちしまで哉りのさちなおほやけまき
あらひのうちまでまちつまみはすき
こまかひよこはさへをかなきそはち
ゆくもうけひめあそん
ここよ影媛おさあうけむことまてよね
だりて家ようらんとまちちかよの

ぞんてもとびて云くるし哉うれ今
日我愛夫（めくしおと）をうしなひけといひてをる　悲歎
がちらいきちなまいささむとそれ　濡　汾　搶
て哥よみて云
いをよしなすのはさかよちしにすの
みけくつはれこなそくちびの
まくことあさか涙ないのこ
冬十一月涙ちのえとしの朔涙ちのん
祇の日大伴（おほとも）のうれむしのむらし太子よ

ろうわまうして猶うさう〳〵真鳥(まとり)のあ
さとうち滅へしこれをうらんと請(こ)
まうけ太子のるまちく天下まさまに
られな人とも世をそくれうるけき
ひとまあらひはくそくはしよくこれを(雄)
やそくせんひとはそのむらしなんのそ(漆)
なもちとるよもわらはさるむこゝる
大伴の大むらしいくさをひきゐてこれ
うゝいくさ(将)のきみとして大まうきゝ

の宅をかこみて火をはなちてやくさ
しまのく所雲のいちくうたひかりく真(ま)
鳥(とり)の大まうきみ事そくもさうとう
らミ矛のおれるきゝもとさとわく
もわらとかすはまわのそみゆんてひわ
く壇をさうしてのかふて済ひまへる
られぬそのみ才(いろ)さんよのろくま時り
よゝ角(つの)庸のうみるしはとさもそれて
のうちはこれよりて角鹿のしほを

天皇のねはんさめよおめのとんこのは(所食)
のうらのしけい天皇のおけんさめよい
こまん十二月大伴の(忌)うれむらの連あら
きらいらをたけの(ゐ)ちを侍てまつさいと
ちと太子よつくしらてまつさて尊号(こゝ)
とうてまつんとまうしてまうさ
くいう億計(おけ)天皇のみこいらい陛下(きこ)のこ
ましまんおけんうらのよわりてま(僂 兆 攸 婦)
流ことこえりて二川とましまさん

又あめのうそ〻のふらゝまのふゑる
しってあらをちひぬそくれうる(頼皇天巽裁 英)
ちうわゝとうとをしきうはりわゝあり
川いきほひあり川ちらしちとうゝやゑ
王日本(やまと)よかうしハ主(きこ)としまん日本よ主(きこ)
まけんよハ陛下(すめらみこと)よおもしまさてハ誰(た)
そ婦してねのちくハ陛下(きこ)あふひて霊(たま)
祇(くに)よまうし流ひろくおほきわうみこと
のうらとの人日本よてらませおおわきに(誕)

かうのくにとうけるまへに太子
はさくよおほせてみくらゐ、
川せのかうみきよかまへてあまつ日つき
しろしめしつひよ都をさため給この
日大伴金村のむらしをもて大連とされ
し給
元年春三月ひのとのうしの朔つち
のえとらの日春日の娘子をたてゝ皇后
としのふ いまうゝ娘子の父 はすしうつらん こし大とし

つちのとのう
二年秋九月はらめるをんなのはらをさ
きてそのはらのうちをみそなはし
三年冬十月人の指甲をぬいてしまをほ
らしむ十一月大伴の室屋の大むらし
にみことのりして志なのゝ国の男丁
をおこして城のかたちを水流のむら
によくらしむよりて城上と号
うこの月百済の意多郎卒ぬ高

田の丘の上にをさめけり

四年亥四月人のしらのからこそめきて

きのそんよのほうし以えて樹のまゝをと

きかまゝしのかみしひとをおとし

ころしてまのしひとしのふ

こよし百済の末多王あらきなしお

ほんなうをそこなひや如国人つ

ひよそて嶋王をたすけこれを武寧王

とし

百済新撰云末多王あらきなし

おほんなうをそこなひやふる国

人ともよそて武寧をたて諱ハ斯

麻王これ混支王子の子なれはち末

多王のことをうの兄なり混支やま

とにまうてる時はくしの嶋にいたり

て斯麻王うまれたり嶋よりかへし

おくりて京にまうのほりむ嶋にて

むまれしゆへにかく嶋とな

はくいふ各羅の海中に主嶋(ぬりむせ)とい
ふ嶋なり王のうまれし嶋なるゆへ
に百済人なつけて主嶋といふ今あ
人まうすに嶋王ハこれ蓋鹵(かうろ)王の子
末多王ハ混支王の子なりこれを異(こと)
母(いろ)の兄といへりいまたつまひらかな
らす
五年夏六月人をして塘槭(つゝみのひ)にふせ
入なかれて外にあふるゝを三刃のほこをも

てさしころしてたのしひとし給
ふ
六年秋九月きのとのみの朔日みことのり
してのたまはく国のまつりことを
つたふるまつりハ子をたてゝたふとする
しとす朕ひつき(継嗣)なし何をもて
か名をつたへんまゝ天皇のふるきあ
とのまゝに小泊瀬(をはつせ)舎人(とねり)をゝきつくせ
て代(みよ)の号(な)としてよろつ(万歳)とせまて

もわすれさらしめんとのたまふ
冬十月百済国より麻那君（まなきみ）をまゐらし
てみつきたてまつる天皇おもほさく
百済より年ふるまてみつきのこ
てまつらすとゝめてゆるしたまはす
七年春二月人をして樹のほら
せて弓をもていおとしてゑのし
ゝ給ふ
夏四月百済国（くたらのこきし）斯我君をまゐらして

みつきたてまつることに（別）表（ふみ）たてまつ
りていはくさきにみつきたてまつりし
つかひ麻那（まな）は百済（くたら）国の主の
やからにもあらす（骨族）そ故につゝしんて斯
我（か）をまゐらしてみかとにつかへまつりて
まつらしむつゐに子ありて法師君
といふこれ倭君（やまときみ）のおやなり
八年春三月女をしてひたはたかにて（躶形）
なし平板（ひらいた）の上にすへて馬をひきて

前にして遊ばせしめ女の不
浄をみるときにうるほへるをはころし
うるほはさるをはめしいれて官婢
となし給これをもてたのしひとし
そのまへこの時にたくみて（設）池をほり
苑をおこしてもて禽獣をみてり（田獵）
をこのみ給て狗をはしらしめ馬を試
て出入も時ならす大風ふくも甚雨
ふるをもさけす衣あたゝかにしておほ（百）

んたからのこゝゆることをもわすれ
給うまきをくらふて天下のうゆるこ（饑）
とをもわすれしませめおほきにひき（侏）
ひとわさをきをめしおもしろき（倡優）（嬾熳）
のしひをなしあやしくうるさて（奇）（偉）
あそひもまうけてみたりかはしき声（靡々）
をほしいまゝにし給ひ日夜つねに
に宮人とおほみきにゑひさまたれ（飢酒）
てにしきぬいものをもて席とし

あやきぬをきせ給へるひとおほし
冬十二月みのくまつの朔たちのと
紈
のいの日天皇列城宮にうつりましぬ

大日本帝國圖書之印
日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan